

大通りに取って返した敏生は、「名前でも人を判断するのはやめよう」と、自分に言い聞かせた。歩き回っているうちに、ロンドンには弁理士街というものがあることを知った。道の両側には、「本物の」大事務所が立ち並んでいる。いずれも百人を越える規模だ。

欧州歴訪は、予想以上の収穫を敏生にもたらした。敏生自身と台湾を大いに売り込むことができたし、連絡先の資料や現地の情報など盛りだくさん。大西洋の向こう側、アメリカに向かおうとする敏生は、晴れ晴れとした気分で行かばんを手した。

アメリカ訪問

欧州に別れを告げて敏生は、浅村氏の紹介状とありあまる自信、そして一山の荷物を携えて、アメリカ新大陸に降り立った。

ニクソン大統領就任約半年。世界の注目を浴びて月面着陸の一大イベントが秒読みに入っていた。興奮の渦の真っ只中に。アームストロングの「人類の第一歩」を、テレビで見ていた敏生自身も、新天地アメリカに、その第一歩を踏み入れたばかりだった。

ニューヨーク・ケネディ空港から、ミラー法律事務所共同経営者・蘇木先生の準備してくれた歓迎会に直行。蘇木先生は厚遇してくれた。彼の計らいでニューヨーク事務所にデスクを提供され、敏

生はニューヨークに「臨時駐在事務所」をもつことになる。

蘇木氏だけではない。ミラー事務所の人たちはみな親切にしてくれた。敏生はホテルで一週間過ごす、シーランド氏の好意で、ウエストサイドストーリーの舞台を向いに見る、セントラルパークわき東六六番街の高級別荘地を提供された。階下の守衛は威勢のよい黒人。毎朝、拳手の礼で「Good Morning Mr.Lin.」と挨拶をくれた。

台湾国際特許法律事務所の欧米案件第一号は一九六六年三月、AT&Tから来た。日本の『ダイヤモンド』誌を読んで、AT&Tが世界のトップメーカーベストテンの一つだと知っていた敏生は、突然ふってわいたこのチャンスに大喜びした。実は、日本の岡部正夫弁理士の紹介だったが、これは後で分かったこと。

案件は、AT&Tの関連企業で電話メーカーのWestern Electricが、台湾における特許出願を依頼したものの。分厚い特許仕様書を手にしたのは三月八日。敏生の記憶は鮮明である。事務所内で技術関連文書の翻訳を担当していたのは、のち淡江大学電気学科主任教授となる余繁さん。当時は台湾大学電気科の学生だった。訳出に頭を悩ましている彼を見るに、見かねた敏生。「逐次訳に拘泥することはない。英語の三句を中国語の一句に訳すようにすればよい。」と、韓忠謨先生の翻訳特殊部隊で習い覚えた秘訣を伝授。ずいぶん役に立ったようだ。一週間後の三月十五日、敏生は翻訳の完了した申請案を提出している。

Western Electricは敏生の能力を評価し、同年度内、立て続けに七つの案件を依頼してきた。今回のアメリカ遠征では応援団を買って出て、敏生を盛立ててくれた。

ブロードウェイ一九五号の会社を訪れた敏生。「台湾で貴社の代理人となれて、これ以上の光栄は

ありません。貴社のためにも、一番の弁理士事務所になります。」と宣言した。当時、アメリカ関係の特許代理市場は李沢民氏の天下だったのだ。それから、会うたびに「一番になったのか？」と聞かれるようになった。

Western Electric はアメリカの常得意。二十五年のつきあいだが、依頼案件は今でも増え続けている。敏生の訪米には別の目論見があった。当地三大特許事務所の業務に何とかして食い込みたいと考えていたのである。Langner, Marks & Clerk, Haseltine Lake。いずれも本国から外国に出願する特許案件が専門。アメリカのメーカーの多くがこの三大事務所を通じて、外国に特許、商標を出願していた。アメリカ市場開拓に、敏生の避けては通れぬルートだった。

蘇木氏の事務所と取り引きのある Haseltine Lake が、最初のターゲットとなった。蘇木氏の紹介で同事務所を訪れた敏生は、ここで一週間、実習させてもらった。従業員は一五〇名前後。敏生のために、いろいろと説明をしてくれた。この年の十月には、案件の依頼もあった。

次の訪問先、Marks & Clerk は従業員一〇〇名前後。U・S・スチールが主な顧客。この時の訪問を通じて、一九七〇年三月、U・S・スチールの案件は敏生のところに依頼されるようになる。

Langner は最大規模を誇る特許事務所。従業員は約六〇〇人。「この経営者は金にシビア。」という浅村氏の忠告を受けていた敏生。心の準備はできていたが、蘇木氏の秘書がアポイントを取ってくれた事務所のベテラン共同経営者は、たつぷり三十分彼を待たせたあと、「あなたの所は料金が高い。」と開口一番。「挨拶する前に金の話をするのがアメリカの習慣なのか？」と敏生も一矢を報いた。

昼は、総務担当の弁理士と食事をともにしたが、これはいわゆるランチオンミーティング。片手にフォーク、片手にナイフ。口にはステークをほおばりながら、負ける負けけないの応酬。満腹したところ

には、特許代理料金の協定が完全に出来上がっていた。

この年の十月十五日、蘇木事務所の執務室でラングナー事務所の Ladas 博士本人から手紙を受け取った。十一月三日、台湾を訪問するという。「これでうまく行く」と、敏生は成功の予感に興奮を覚えた。

三大特許事務所への訪問を順調に終え、敏生にはまだ三ヶ月の滞在期間が残っていた。週末は妻秀卿の兄の家に泊めてもらい、ひととき家庭の雰囲気を楽しむ。アメリカ郊外ののびのびとした自然に触れ、連日の疲労を癒した。李家の長男李豊明はスタンフォード大学の博士。この頃すでにエンジニアとして IBM に勤務していた。台湾の李家には両親と弟の豊隆、妹の秀麗しかいなかったから、豊明や豊仁とはアメリカでの初対面。秀麗はこの時ちょうど留学で兄の家に住んでいた。敏生は、秀卿との結婚の際、唯一好感をもってくれたこの妻の妹を可愛がり、留学生の窮状も聞いていたので、気前よく五〇ドルの小遣いを与えた。現在の夫君陳良平氏との見合いの席にも顔を出している。豊隆もアメリカにいた。「台湾にはいつ帰るのか？」と聞くと、「蔣経国が死んでから。」と言う。政治意識のあまりなかった当時の敏生は、「蔣経国が何か機嫌を損ねるようなことでもしたのか？」と、訝つた。敏生にとって、豊隆と秀麗はいつも聖歌隊のイメージ。秀卿の里帰りに「姉夫婦歓迎」の段幕を張って、きれいな声で歌ってくれたあの時の二人がなつかしく思い出される。アメリカで再会した彼らは、もう大人になって、独自の考え方を持っていた。

異郷にあっても寂しいと感じたことはない。週末を終えると敏生は、また彼の驚異的な外交手腕を発揮した。洗練された上流階級の紳士たちにも、率直な気持と寂しがり屋の一面がある。家庭のこと、結婚生活のこと、妻の浮気のことまで、彼らは敏生に何でも打ち明けてくれた。

もちろん、彼らが心を開くまでには、それなりのプロセスが必要だったが、敏生には、ともに熱論を交しエキサイトできる共通の話題、スポーツがあった。敏生の滞在中に、長年低迷のニューヨーク・メッツが、ナショナルリーグで優勝を飾るといふ快挙を演じた。ニューヨーク子はみな喜んだが、敏生の興奮ぶりは彼らの上を行っていた。

十月初めに日本へ赴くことになっていた敏生が二週間、アメリカ滞在を延期したのは、実はワールドシリーズの結末が気掛かりだったため。Haseltine Lake が手に入れてくれたチケットと、この試合のために買った望遠鏡を持って球場へ。メッツが優勝を決めて、大満足で敏生はアメリカを去る。

アメリカでの実績は？一九六九年八月、ダラスを振り出しに始められたメーカー、法律事務所の訪問は一日平均三社前後。スタンダードオイルやデュポンといった大企業も網羅。ヨーロッパの人脈と合わせて、敏生は地球のいたるところに友人の輪を築いている。彼らが与えてくれたチャンスと、敏生はしっかりとつかんだ。

同業者の中に多くの友人を得て、敏生は、東西文化の違いを数多く体験した。しかし不思議なことに、現地アメリカ人のバックボーンを理解できる敏生にも、アメリカに移民した台湾人の考え方は納得できなかつた。

彼らはアメリカで必死にサバイバルを求めている。それはいい。だが、アメリカの生活水準をひけらかし、敏生にまで移民を勧める彼らが、台湾の前途を憂い、独立を主張したり、国民党政府を痛罵するのを見て、「対岸の火事」を騒いでいるような、そんな感じをもってしまうのである。大家族の中で育った敏生には、故郷を離れて孤独に暮らしている彼らの方が、いくら生活が豊かであろうと、かえって不憫に思えるのだ。移民を勧める方も善意で言ってくれているのだろう。自分の考えは胸に

しまつて、敏生はその善意だけありがたく受け取つた。

しかしその後、猫も杓子もグリーンカードという台湾の風潮にいらだつた敏生は、時流に反した言論でよく人に煙たがられた。西洋崇拜が我慢ならなかつたのである。「来月、アメリカの孫に会いに行くんだ。」と得意げに話す金持ち連中には、虫ずが走つた。「人には根つこがなければ。移民に反対するわけではないが、二股かけて良いほうに転ぶというのでは、あまりに投機的すぎはしないか？

李遠哲博士のように、台湾に戻るなら潔くアメリカの国籍を捨てるべきだ。」と敏生は言う。

アメリカに移民しようなどは、敏生自身、ただの一度も考えたことはない。

アメリカで我慢ならなかつたものの一つに、上下関係がある。口を開けば「敏生、敏生」と、子供でも呼びつけにする。憮然として聞き流してたが、ある日、アメリカの弁護士を訪ねた折、彼の甥が敏生を「Uncle」と呼ぶのを聞いて一安心。それからは遠慮ない子供たちに、「上流社会では目上の者を尊称で呼ぶんだぞ。」と教えることにした。

他人の奥さんにしても同様。名前で呼んでいいといくら言われても、敏生は必ず「ミセス」を付けた。親交の厚いスタンダード・オイル特許部門の責任者から、自宅で接待を受けた時も、きさくな奥さんから、「マリー」と呼んでほしいと言われたが、結局、最後まで「ミセス」で通した。西洋文化の中においても、敏生はやはり東洋のスタイルに固執した。これが一番落ち着くからである。

一九七〇年、二度目の訪米の際、知り合つてまもない敏生に大きな力添えをくれた彼ら異国の友人たちに、敏生はニューヨーク最高の日本料理をご馳走した。このパーティーに参加した唯一の日本人、湯浅法律事務所の下坂スミ子弁理士は、日本文化と日本料理に対する敏生の博学に舌を巻き、日本人よりも日本人みたいだと、驚異の目を向けた。